



この記事がすごい！ 毎日新聞今週のこだわり4本

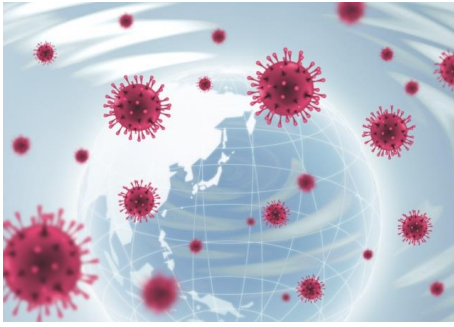
2021年7月11日号

編集／毎日新聞社カスタマーリレーション本部

論点

コロナ第4波 大阪の教訓

14日(水) = オピニオン面



2021年春、新型コロナウイルスの感染「第4波」に襲われた大阪府では、3月1日～6月30日に5万人以上が感染し、1500人以上が亡くなりました。ワクチン供給の遅れにより、集団免疫の確立が道半ばで足踏みしている今、次の

「波」にどう備えたらいいのでしょうか。医療崩壊状態に陥った大学病院の院長、感染症政策を担う大阪府幹部、そして肉親を失った家族の証言から、「大阪の教訓」を探ります。

特集ワイド 選手村村長の川淵三郎さんに聞く

12日(月) = タ刊特集ワイド

コロナ禍が収まらず、東京オリンピックは1都3県で実施される競技が無観客で開催されることになりましたが、感染対策を整えながら五輪開催を楽しみにしているのが選手村の村長、川淵三郎さん

(84) = 写真 = です。女性蔑視発言で辞任した東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長(当時)の後任を巡るドタバタ劇などを含めて、異例の五輪への思いを川淵さんが語りました。



補助人工心臓装置を付け、心臓移植を待つ当時2歳の青山環さんと、父親の竜馬さん、母親の夏子さん=大阪府吹田市の大阪大病院で2016年、生野由佳撮影



コロナ影響？ 臓器移植、大幅減

16日(金) = くらしナビ面

昨年、国内の臓器移植件数が大幅に減りました。背景には、新型コロナウイルスの感染拡大で、救急医療の現場が逼迫(ひっ迫)があつたことなどがあつたこととみられます。コロナ禍が続いている

移植を担う医師は危うい。取材した臓器移植を支援する団体からは、命をつなぐ臓器移植が後回しにならなりました。

60年ぶりによみがえったロケット旅客機構想

15日(木) = 科学面



宇宙空間をロケットエンジンで飛行し、世界の都市間を1時間程度で結ぶ「宇宙旅客機」の開発に日本が乗り出します。しかし、第二次世界大戦の敗戦から間もない60年以上も前、同様の「ロケット旅客機」を構想した人がいました。「ペン

シルロケット」に始まる国産ロケット開発を先導し、「日本のロケットの父」と呼ばれる糸川英夫(1912～99年) = 写真 = です。先駆者が目指したものは何だったのでしょうか。教え子の証言などから探ります。

新毎日



(渡部竜之介)

7月より始まった日曜朝刊の目玉企画「わたくしのふるさと便」は、毎週47都道府県を順番に取り上げ、今週は高知県が登壇します。第1回の先週は千葉県で、住民の私は「千葉県あるある」を見ながら、地・福岡県が登壇、納まらした。来週は出身地・福岡県がある「納まらした」を期待していただきます。毎週ご当地の名産品プレゼントコーナーもありませんので、奮ってご応募ください。



※都合によっては掲載日や内容を変更する場合がございます。あらかじめご了承ください。